HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Romeo and Julietにおける作者的存在の操作
Author(s)	宮下, 弥生
Citation	日本英文学会北海道支部第48回大会. 平成15年10月4日～平成15年10月5日. 札幌市.
Issue Date	2003-10-04
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/39212
Type	conference presentation
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	miyashita-2_note.pdf (発表原稿)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

*Romeo and Juliet*における作者的存在の操作

日本英文学会北海道支部第48回大会
2003年10月4日

*Romeo and Juliet*において、恋人たちはまわりの状況を省みず、自らの感情に身を任せることしかしなかった一方で、劇の最後では些細な偶然が積み重なり、二人は死を選ぶことになります。このためこの作品の悲劇性を論じる場合、これまでは悲劇的結末は運命によるものなのか、あるいは主人公達によるものなのかという議論が主に行われてきました。H. B. Charltonは*Shakespearian Tragedy*(1948)の中でFateも両家の確執も悲劇の重厚さを表現するには十分な力を持っておらず、この劇は悲劇としては失敗作であると論じています。John Lawlorは*Early Shakespeare*(1961)の中で、中世の悲劇の概念からこの劇を考え、主人公達は人間には避けることができない運命の犠牲になったのだと論じています。またBertrand Evansは*Shakespeare's Tragic Practice*(1979)の中で、RomeoとJulietのみならず他の人物たちの行為もすべてPrologueに規定され、plotの展開を全てFateが請け負っていると述べています。一方、F. M. Dickeyは*Not Wisely but Too Well*(1957)の中で二人は盲目的で向こう見ずに愛を追い、その過度な感情のために当然罰せられたのだと論じています。

本発表では何が悲劇の原因なのかを探求するのではなく、plotの展開と結末での主人公達の死はすでにtextとして与えられているという立場をとり、その中で主人公たちの死すべき運命がどのように扱われているのかを論じたいと思います。一見、劇は登場人物たちの科白のやりとりからなるflatなtextであるように見えますが、この劇においてはその一元的な科白のやりとりの上に、それを高い位置から統轄する存在がその作者的視点から意義付けを行っていると考えることができます。実在の劇作家Shakespeareとは一線を画する、小説におけるimplied authorに相当する存在を想定し、その具体的な操作を検討し、それに対してimplied readerに相当するidealな形での観客（/読者）を想定し、作者的存在の操作が観客にどのような働きを及ぼしているのかを考察していきます。

この作者的存在がflatなはずの登場人物の科白に、登場人物の死というテーマをどのよ

うに表現しているのか、また自分たちの死すべき運命を知らない登場人物たちの現時点の言葉が、結末での死という運命に対してどのような意味を持っているのかを考察し、そのことがひいては観客の側の受容とどう関わっていくのかを考察するのが、本発表の目的です。

１．Prologueによる位置付け

劇の冒頭、PrologueでChorusはこれから演じる劇の背景を説明するばかりか、二人の恋人たちが死に、その死をもって両家の怨恨が解消するという結末をも観客に知らせてしまいます。しかも、ハンドアウト（1）にあげましたが、恋人たちが生まれた時から死ぬ運命にあることは"fatal" ""star-crossed" "misadventured" "overthrows" "death" "fearful" "death-marked"と表現を変えながら、わずか14行のsonnetの中で特に強調されていきます。中でも"A pair of star-crossed lovers"という表現は、生まれたときの星の位置関係でその人のその後の運命が決まったという中世以来の考えを受けてのものであり、生まれた時すでに恋人たちが死ぬことを運命づけられていることを、わずかの言葉で端的に表現しています。また"their death-marked love"は「死の烙印を押された愛」という意味と「死を目標として目指す愛」という二つの意味をかけた表現となっています。そしてこの二つの表現は二人の愛とその結果である死を強く結び付ける働きをしています。こうして観客（/読者）は主人公達の死すべき運命をあらかじめ知った上で劇を観ていくことになります。一方、ここで大切なのはChorusの位置付けです。２行目、12行目に見られるように、"scene" "stage"という語を用いることでChorusはこれから演じられるのが虚構であることを積極的に示しています。つまりChorusは劇中世界を外側から眺める視点を持っており、その点で小説における三人称の語り手、あるいはF.K. Stanzelの用語では、作中世界の外側に存在し、客観的な視野から語るauthorial narratorに相当するものであると考えられるでしょう。では、次に作者的存在がこのような人物を起用して劇の冒頭で主人公たちの死をあらかじめ規定することが、その後どのような影響があるのかを考えてみたいと思います。

２．登場人物の科白に死ぬ運命を重ねる操作--層を成すtext

Caroline Spurgeonは（2）にあげましたが、*Shakespeare's Imagery and What it Tells Us*(1935)の中で、ある劇の中で繰り返し用いられ、劇の雰囲気を作り出したり、テーマを強調する一連のimagesのことを"recurrent images"と位置付け、*Romeo and Juliet*を支配するimageを闇を背景とした光であると説明しています。また一瞬光ってすぐに消えてしまう弾薬の光のimageを繰り返し用いることで、恋人たちの愛のきらめきとはかなさを表現していることも論じています。しかし、SpurgeonはShakespeareのimageryの使用は無意識的で本能的なものであると説明し、また各作品にみられる数々のimageを取り出して分析した結果、特定のimageが繰り返され、その作品のテーマを示していることが明らかになったと述べています。

しかし、登場人物の科白を吟味すると、作者的存在が積極的に恋人たちの死すべき運命というテーマをその科白の上に重ね合わせるように呈示していることがわかります。

まず、１幕４場、RomeoがCapulet家の宴会に向かう際、不吉な胸騒ぎを覚えます。（5）です。これはThe New Cambridge Shakespeareの編者、G. Blakemore EvansはPrologueにみられる"star-crossed" loveのテーマへの最初の明白な言及であると述べています。表層つまりRomeoの心情としては、宿敵の家の宴会に乗り込むことへの不安が表現されているのですが、早すぎる死に言及することで、Prologueで述べられた死のテーマを受けるものとなっています。さらに、"star" "fearful" "death" とPrologueで用いられたのと同じ語を用いる点でもPrologueを受けるものであり、観客は改めて宿敵関係にある二つの名家とその子供たちの死を想起することになります。そして（6）は、２幕２場のbalcony sceneでRomeoの誓いの言葉を制止するJulietの科白です。ここを受けSpurgeonは（4）二人の愛のつかの間の輝きの感覚が、危険と破滅の感覚を伴って、強調されていると説明しています。そして結婚の約束をしたRomeoはLawrence神父のもとに行き、結婚させてくれるように頼んだときのLawrence神父の科白が（7）です。ここでは二人の結婚が両家の確執を解消するかもしれないという幸福な結末の可能性と二人の死すべき運命が対置されることでironyの効果が高まっています。また（8）３幕５場の別れの場面で、Julietは生きて会うことがないのではないかと不安な心持ちを口にします

が、さらにJulietはRomeoを墓に横たわる死人のようだとさえ言ってしまいます。そして、５幕１場でRomeoはJulietの死の知らせを受け（9）運命の星に挑もうという決意を述べます。そして、５幕３場でJulietが死んだと信じ、毒薬をあおる前の科白が（10）です。ここではRomeoは死を持って不運な星のくびきを払いのけようといいます。この他にも、作者的存在が登場人物の科白の上に、死すべき運命を重ね合わせる操作が劇全体を通じて展開されていますが、それはハンドアウトの最後の２枚に挙げた通りです。

この一連の例を受けて、The New Penguin Shakespeareの編者、T.J.B. Spencerは（11）「登場人物たちにはわからない劇のコンテクストにおいてはもっと深く残酷な意味を持っている」とその一貫した意義を認めています。しかし、この現象をtextualに捉えてみると、これは作者的存在が、登場人物たちの科白の上に恋人たちの死すべき運命というテーマ的視野を重ね合わせているのであり、登場人物の意図レベルと作者的存在のテーマレベルというようにtextが二つの層を成していると考えることができます。観客はPrologueで恋人たちの死ぬ運命をあらかじめ知らされているために、登場人物の科白の上に、テーマ的レベルも読みとることができます。この操作により、自らの死すべき運命を口にしながらも将来を予見できない登場人物たちに対して、観客は常に登場人物たちよりも知識的に優位に立つことができます。そして、恋人たちが甘美な喜びに溢れんばかりであっても、劇が展開していき二人が窮地に追い込まれていっても、観客は絶えず二人の死すべき運命を想起することになり、そのフィルターを通して各場をながめることになるのです。

3．出来事の呈示の順序から生じるirony---構成上の操作

また、作者的存在は出来事の呈示の順序を操作することでflatなはずの登場人物間のやりとりの上にテーマを表現したり、科白以上の意義を持たせたりしています。

まず、１幕５場にその例をみてみたいと思います。（5）でみたように、１幕４場の最後で主人公の死というテーマを観客に思い起こさせた後、５場に入りほんの42行を挟んで、RomeoはJulietに一目で恋に落ちます。その科白が（13）です。ここではSpurgeonも指摘するように、闇に対する光、黒に対する白で愛のテーマを表現しています。しか

し、ひたすらJulietの美しさを讃えるRomeoの科白の中に、実はもう一つのテーマ、「死」も表現されています。46行目にはJulietがこの世に生きるには余りにも美しすぎ、高価すぎることが表現され、「死」のテーマが浮かび上がっています。そしてこのRomeoの言葉を聞きつけたTybaltの科白が（14）です。観客はRomeoの恍惚とした科白の直後に、「両家の怨恨」というもう一つの厳しいテーマを突き付けられることになるばかりか、54行目の"rapier"という語と58行目の"To strike him dead I hold it not a sin."という科白にRomeoの死を見ることになります。その後、怒り狂うTybaltをいさめるCapulet氏とのやりとりがあり、そして、（15）RomeoとJulietが初めて言葉を交わす愛のsonnetがおかれます。そして、この場は宿敵同士を愛することを知った二人の科白で終わることになります。これが（16）と（17）ですが、ここでも二人は図らずも自分たちの死を口にすることで、観客は戸惑う二人と未来の二人の「死すべき運命」を重ね見ることになります。このように、出来事の呈示の順序を操作することで、「愛」「両家の怨恨」「死」というこの劇の大きな三つのテーマが隣り合うように呈示されており、さらに、それが二人が初めて出会う場であるということ、また１幕５場という劇の早い段階ですでに呈示されていることは意義深いことであるといえるでしょう。

同じように作者的存在が出来事を呈示する順序を操作することで、客観的な視野から意義を持たせている例を第３幕にみてみたいと思います。３幕１場でRomeoはTybaltを殺し、大公がRomeoを追放に処するところで終わり、その直後２場はJulietが床入りを待つ祝婚歌で始まります。（18）にあげましたように、場が変わるとはいえ、演じられる場合には大公の科白とJulietの科白は連続しています。Romeoの追放を知らないJulietが口にする床入りへの不安と期待、Romeoを待つ気持ち、そして"Gallop apace"に表現されるJulietの弾むような心持ちは、観客は直前にRomeo追放の厳しい宣言を聞いているだけに、さらに観客の胸に響くものになっているのです。

その後、２場ではJulietの、３場ではRomeoの、「追放は死とも同じ」と嘆く場面があります。（19）（20）です。そしてその３場はRomeoが最後にFriar Lawrenceから今後の身の処し方を示され、Julietの部屋へ急ぐところで終わりますが、この３場と５場の二人の別れの場との間にわずか35行からなるCapulet夫妻とParisの結婚の取り決めの４場

が挟まれる構成となっています。同じ屋敷内でほぼ同時に進行している二つの出来事をこの順序で呈示することで、観客はほんの思いつきから結婚を承諾し、知らないうちにJulietを窮地に追いやっていくCapulet氏に対し、別れを前にした恋人たちの引き裂かれるような思いを味わうことになります。（21）５場冒頭の、朝が来たことを告げるひばりのさえずりをnightingaleだと言い張るJulietの突拍子もない言葉は、実はひばりをnightingaleだと必死にも信じ込みたいというJulietの葛藤の表現なのです。そして観客はこの後二人が生きて会うことはないことを知りながら、描かれなかった、二人に許されたたった一夜、追放を目前にした最初で最後の一夜を自らが思い描くように促されているのです。このように自分の置かれている状況を認識できない登場人物たちに対し、作者的存在は出来事の呈示の順序を操作し観客を知識的に優位に立たせることで、ironyを作り出すことにも恋人たちの心情にintensityを与えることにも成功しているのです。

４．表現を得ていく恋人たち

一方、劇が展開するに従って恋人たちは自らの気持ちを表現する力を得ていきます。二人が出会う前、１幕２場ではRomeoは実質的な体験や感情が伴わないPetrarchan loverであり、その見かけ倒しの憂鬱ぶりはMercutioを始めとする友人たちのからかいの対象となります。またJulietが初めて登場する１幕３場ではJulietが言葉を発するのは106行中、わずか７行で、少なくとも表向きは母親に対して口数の少ない従順さを見せていました。そして（15）に挙げた二人が初めて言葉を交わす場面では巡礼、聖者の像という比喩を用い、sonnet形式にのっとって、言葉遊びを楽しみながらまるで恋愛ゲームをしているかのようです。それが二人が愛を知り、思いを深めていくにつれ、自らの気持ちを雄弁に表現できるようになっていきます。それがJulietでは早くも２幕２場のbalcony sceneで見られますが、ほとばしる思いを表現せずにはいられないJulietは、（22）恋愛のお作法や慎みを捨て去ります。そしてみずみずしい表現で豊かに自分の気持ちを繰り広げていきます。しかし、この場では（24）に見られるようにRomeoは依然として夢見る恋人の姿勢を捨てきれないでいます。これはRomeoはJulietよりも精神的な成長が遅いことがよく指摘されているとおりです。

３幕３場では、追放になったことを嘆くRomeoは涙に飲まれるばかりで、自暴自棄になって自らに刃を向けようとさえします。それに対し、（25）Friar Lawrenceは"There art thou happy."という表現を繰り返し、Julietは生きている、Tybaltはおまえを殺そうとしたのに、おまえが彼を殺した、死刑になるはずが追放になったと説得を試みます。ここではRomeoの（26）「感じられないことは話せない」という言葉が端的に示すように、Friar Lawrenceの月並みな説得と繰り返し表現が空虚であるのと対照的に、ひたすらJulietと一緒にいたい、Julietがいない世界は自分にとっては死に等しいのだとさえ言い切るRomeoの悲痛な心情が表現されているのです。

そして最後には二人ともが、死を覚悟してでも愛を貫こうとする姿勢をそれぞれ表現することになります。Julietでは４幕３場、効き目の知れない眠り薬を飲むときの恐怖を死をも辞さない覚悟で克服していくJulietの言葉に見ることができます。

一方精神的な成長が遅いRomeoも、第５幕に入りJulietの死の知らせを受けると、（27）"Is it e'en so? then I defy you, stars!"と自らの意志を持って星への挑戦を始めます。Romeoは直ちにJulietのもとに行って死ぬ覚悟を決めますが、その意図は自らに込めたままBalthasarに指示を出し、（３幕３場で自暴自棄になって自殺しようとしたのとは対照的に）落ち着いて死への手はずを整えていきます。その固い決意がRomeoの（28）の力強い表現に見られます。最も貴いJulietを飲み込んだ死の胃袋を呪いつつも、自分もさらに詰め込んでやるという意気込みは、墓穴をつるはしで無理やりこじ開けるRomeoの所作を伴うことで、さらにその力を増すことになります。そして、この科白がその前のJulietの死を嘆くParisの科白（29）と対照されていることも意義深いことです。Parisの言葉は花であるJulietの墓に花をまき、嘆きの涙を注ごうという常套的なものに過ぎず、rhetoricalな脚韻もその言葉の空虚さを強調するものとなっています。Parisは最後まで、Romeoの"foil"引き立て役であり、内実を伴わない蝋人形("a man of wax"1.3.77)としての役割を果たしています。そして（30）Romeoの毒薬を飲む直前の"Eyes, look your last! / Arms, take your last embrace!"という言葉は直接的であるがゆえに力を持っているのです。

5．作者的存在の操作の持つ意義

さて、以上論じてきたことは、Shakespeareが材源のArthur Brookeの物語詩、*The Tragicall Historye of Romeus and Juliet* (1562)に行った改変と密接な関連があります。とりわけJulietの年齢を16歳から14歳まであとわずかという設定にした点、Brookeでは数カ月に渡る出来事をほんの４日と少しにしてしまった点、しかも、RomeoがTybaltを殺してしまうのはBrookeでは二、三ヶ月の結婚生活を秘かに楽しんだ後であったのが、Shakespeareは二人に完璧に幸せなときをほんの一夜すら与えていないという点は、大きな意義を持っています。

しかし、本論ではそのことも考慮に入れた上で、一つの完結した劇作品として捉えた上で、作品世界を客観的な視野から統轄する作者的存在が行う操作とその意義、観客に対する機能を考えてきました。劇は登場人物間の科白のやりとりというテクストから成り立つものですが、それだからこそ、観客を導く上で客観的な視野から意義付けを行う必要性がでてきます。

作者的存在は、まず劇の冒頭、Prologueで小説におけるauthorial narratorとも言うべきChorusに恋人たちの死という結末を観客に知らせることで、観客を登場人物よりも知識的に優位に立たせる働きをしました。それを受け、作者的存在は劇中の登場人物の科白の上に恋人たちの死ぬ運命を重ねる操作を行っており、観客は絶えず二人の死ぬべき運命というフィルターを通して考えるように促されていることを論じました。また出来事の呈示の順序を操作することことでも、自分たちのおかれている状況を認識できない登場人物に対して、観客を知識的に優位に立たせることで、ironyを作りだしながら、恋人たちの心情に力を与えていることをみてきました。一方、劇が展開していく過程は、恋人たちが愛を知り、自らの思いを表現できるようになっていく過程でもあります。作者的存在が行う操作により、観客は恋人たちの死ぬ運命を念頭に置きながら、その時その時の二人の心情の吐露を味わうことになります。つまり、この操作により、運命と恋人たちの現時点が対置されることになるのです。作者的存在の行うこのような操作は、観客のsympathyを操作することであり、恋人たちにとっての真実である、その瞬間の心情にintensityを与える働きをしているのです。